

大賞

長崎県島原市 岬 とうこ

夜中の侍

ユキは新米看護師です。夜中の見回りで五〇八号室をのぞくと、患者のベッドの下に一冊の本が。拾い上げると、小さな侍たちが飛び出してきました。「キヤツ!」「騒ぐな小娘。わしらはこの本の登場人物じゃ」松明を手にしたひとりがささやきます。「と…：登場人物?」別のひとりが頷き、腰の刀に手をかけます。「作者から病の魔物を追い払い、続きを書かせるために参つた。あそこにいるぞ」そういうとヒラリと舞い上がり、隅の暗がりをまばゆい刃で「えいつ!」「ウギヤう!」恐ろしい叫び声と同時に消えた侍たち。その病室の患者は退院し、歴史小説を出版。ふたりの侍が大活躍する作品は、ユキの愛読書となりました。



京都府城陽市 いつき

準大賞

曲者め！

「曲者め！ 神妙にいたせ」

「待て、逸るな。まずは相手の出方を見よ」

勇み足で抜刀しようとする小次郎を、小太郎が制した。まるで目前にいるようだけれど、異世界の住人のようにも思える少年が、四角い板の小さな穴をこちらに向けている。しかし、少年も大人から止められて、板を向けるのをやめた。小太郎は、やれやれと溜息をついた。血の気が多い弟をもつと、大変だ。その歴史画展で、武者絵にスマートホンを向けた少年が注意された。

「お客様。絵画の撮影はご遠慮願います」

「ダメか。学校で自慢しようと思つたのに」

少年は渋々、スマホをしまつた。画中の二人の武士は、立ち去る少年を見詰めていた。



入選

山梨県富士吉田市 ひまわり

女の子と男の子

お屋敷に暮らすおばあさん、
独りぼっちが寂しくて、池のアヒルと仲良く
なりたくなつて仕方なし。

可愛い女の子に変身し、

ビスケット1枚手に持つて、

「こつちにおいで」と声かける。

けれども、可愛い男の子がやつて来て、

アヒルたちつたらそちらにばかりもう夢中。

おばあさんは、悔しくなつて、

男の子を力まかせに突き飛ばす。

「なにをするんじや」、怒鳴り声。

池の中には、変身解けたおじいさん、

ずぶ濡れになつて座つてた。

隣の屋敷のおじいさん、

独りぼっちが寂しくつて仕方なし。



入選

東京都八王子市

漣

夜警

異形の祭囃子である。異形の祭囃子が、音もなく夜警の前を通り過ぎていた。先頭を歩くのは、家ほどもある大きな獸であつた。細長い頭の左右には目玉が四つずつ。黒の縞模様が入つた赤い体に沢山の提灯飾りをつけて、これまた大きな櫓を引いていた。櫓では鈴や太鼓が踊り狂うが、少しも音は聞こえない。

「妖魔め。斬り捨ててくれる。」と大太刀に手をかける男を、前の男が制した。「待て。これは葬列だ。死者の世では葬列の方がめでたいのだ。人を食うようなものでもないから斬るな。」二人は列を見送る。列の最後は小さな犬であつた。大太刀に手をかけていた男は、その犬を見て「まめ」と、かつての飼い犬の名を呟いた。



入選

大阪府大阪市

おくたに
奥谷かず
き
和樹

つわもの二人

「あ、いや、待て。早まるな。ここから先は火の国だ。水と風の世界に住む我々には、想像もつかぬ所だ。決して近づいてはならない。これは殿のご命令でもある」「兄上、実は昨夜、風になつて見てきたのです。向こうは食べようとすると、食料はたちまち燃え上がり、川は一面火の海、飢えと渴きが支配者の国なのです」「谷一つ隔てた世界が、こうも正反対とは。なぜ今まで気づかなかつたのか」「火炎の勢いで、民の泣き声も消されているのです」「ならば答えは一つだな。俺の水の刃と、おまえの風の剣。今使わずして、いつ使うというのだ」二人のつわものはもう駆け出していました。本当の強さとは、自分の強さを他人のために使うことなのです。



入選

侘助

東京都江戸川区

なか
野リナ

敗けは濃厚だった。弟を連れて逃げ落ちようとした兄の前に、突如、ぼろをまとつたしわくちやな老婆が現れた。何者、と弟が刀に手をかけると、しわだらけの老婆は言つた。

「そのような格好では夜目に目立つ。今宵の闇を縫い付けた着物を差し上げましょう」

気づくと緋色の鎧の上に、ふたりは夜色の着物を身に着けていた。老婆の姿はあとかたもない。兄弟は助け合い、とうとう人里まで逃げ延びた。ふと、弟は兄と自分の着物の後襟に白い糸で侘助が刺繡されているのに気付く。邸の庭に咲くその花を誰よりも大切に育てていたのは……「あの老婆は、亡くなつた母上だつたのか」ふたりは顔を見合わせて言いい、そして、涙ぐんだ。



入選

大阪府貝塚市 花園

はなぞの

メリーアリ

時空兄弟

「兄さん、この時代ならどうだろう？」

タイムトンネルに開いている穴から下を覗いていた弟が言った。

「そうだな、そろそろ見つかるといいな」と答えて、僕は弟と一緒に「一二〇二五年」にひらりと降りたつた。

「ダメだ、兄さん。戦火が見えるよ。この時代でもまだ、人間同士が殺し合つていて

とつさに刀を抜こうとした弟を僕は止めた。

「待て。だけど、武器の代わりにペンを持つて、平和について語る言葉を必死に探している人たちも、たくさんいるじゃないか」

「本當だ、兄さん。もしかすると次の時代でなら、僕たちが探しつづけている『眞の平和』が見つかるかもしれないね……」



入選

茨城県龍ヶ崎市

なかやま

かなと

侍と妖怪

兄の信秀と弟の信行がいつもの通り町に行こうと、林の中を歩いていると、目の前にひらひらと白い布が見えてきた。咄嗟に信行が刀を抜こうとした。すると、信秀が「待て、木の上を見てみろ。」信行が目を凝らして木の上を見ると、長い白い布が枝に絡まりこちらを見ている目が二つあつた。「一反木綿だ!!」信行はとても驚いた。悪さをする妖怪として噂には聞いていたが、実在していたとは。でも、このままにしてはいけない。兄弟は刀で枝を切り、一反木綿を助けてあげた。一反木綿は、ひらりと地面に降り立ち「ありがとう。町まで乗つてくれ。」と、町まで兄弟を乗せてくれた。人間の優しさに触れた一反木綿は二度と悪さをしなくなつたという。



入選

茨城県古河市

鶴見邦久

動き出す人生



「そろそろ来るぞ！」相棒が柄の付け根を強く握りしめる。「慌てるな。」相棒をなだめ、同時に自分自身のはやる気持ちを抑えつける。一方で不安が頭をよぎる。もし失敗したら、俺たちはどうなつてしまふのだろう。しかし、もし成功したとしても俺たちがどうなつてしまふのか、それもうまく想像できないから、先のことを考えるのはやめにする。今、考えるべきことはそんなことではないのだ。ただ死ぬ氣でやるだけだ。暗転したら一気に飛び出して、積年の思いをぶつけてやる。おそらくこれが最後のチャンスだ。これまで人生が動き出す。俺たちは変わる。「よし！ 今だ！ いくぞ、相棒！」エントリーNo. 6572 侍ブルーでコント「居合い抜き」

入選

千葉県匝瑳市

石崎 いしざき

巧大 (高1) たくみ

この先には

鎖の先は岬になつていて

長く長くがつしりとつながつた因縁の鎖
ふと前を見る 果てはここからは見えない
見えるのは無限に続く因縁の鎖だけ
不安になつてしまふ 焦つてしまふ
この先に本当に果てはあるのだろうか

いや待つんだ 落ち着くんだ よく聴くんだ
岬には光を放つ塔がある その光が見えるか
どんなに衝動が襲おうとも前も後ろも見るな
ただ光を光を 希望に満ちた光だけを見ろ
そして歩み続けそれを大きくし続けるんだ

上を見ると小さくかすかに見えた希望の光
いつか必ず辿り着く 潮風香る光の始まりへ

